



発行元：NPO 法人 東アジア政経アカデミー

発行元連絡先：〒168-0082 東京都杉並区久我山 4-38-14 電話：03-3332-8481 FAX：03-3332-8433

URL：http://www.eapea.sakura.ne.jp/ e-mail：shnagano@d8.dion.ne.jp

この号の内容

1 はじめに

- 明治期外交官若松兎三郎の生涯 (永野慎一郎)

2 活動報告

- 講演会およびセミナー等参加
- 木浦市長一行東京訪問 歓迎会
- 木浦高下島特別展
- 故金熙秀先生 5 周忌記念 式典

3 会員からの便り①

- 未知と謎のおもしろい国々
-北朝鮮・カンボジア訪問記-
(薄葉威士)

4 会員からの便り②

- 故金熙秀先生 5 周忌記念 式典
- ◇ご挨拶 (河正雄)
- ◇先生の思い出 (申景浩)

編集後記

明治期の外交官 若松兎三郎の生涯

東アジア政経アカデミー代表 永野慎一郎

大分県玖珠郡森村（現在の玖珠町森）で生まれ、同志社で教育を受けてから、東京帝国大学法学部在学中に外交官試験に首席合格した若松兎三郎はニューヨークや杭州などで外交官として勤務し、1902年から1906年まで韓国木浦領事を務めた。この4年間で若松の生涯において最も輝かしい時期であった。朝鮮半島最南端木浦地方は気候温暖で豊富な天然資源に恵まれているにも関わらず、有効活用されていないことに気づき、日本の技術協力による産業開発を提唱した。一挙両得と考えた。

若松の提案によって始められ、後に韓国の主要産業として発展したのが二つある。一つは、米国種陸地綿（upland cotton）の導入である。陸地綿を木浦高下島で試作し、日本政府および韓国統監府を動かして朝鮮半島全地域に普及させることによって綿産業および農村経済の発展に貢献した。もう一つは、天日塩製塩の提唱である。韓国は食塩不足で日本や中国などから食塩を輸入していた。多額の財貨を費やしている事情を改善するために、中国や台湾で生産されている天日塩に目を付け、地理的条件や気候が類似している木浦地方の干潟地の活用について研究を始め、日本政府に専門技師の派遣を要請した。それが契機となり、仁川朱安に天日製塩試験場が設置され、国策として天日製塩田が築造された。しかし、官営で始まった天日製塩は当初若松が提案したような干潟地が多く、天日製塩に適切な条件を備えていた木浦地方ではなく、京畿道および平安南道に集中し、南部地方は天日製塩から排除された。食塩は依然として不足し、輸入に依存していた。終戦後、韓国政府の天日製塩の民営化推進によって木浦地方の製塩業者の天日製塩参入が可能となり、政府の補助金制度を活用して製塩業界は輝かしい実績を挙げ、朝鮮戦争後の産業復興と自立経済確立に多大な貢献をした。民営塩田の開発促進によって南部地方の各地の干潟地に天日製塩田が築造された。その結果、塩の生産量は国内需要を充足し、1955年から輸入依存から輸出国へと転換した。

陸地綿発祥地木浦高下島には「朝鮮陸地綿発祥之地」記念碑があり、周辺に木浦市によって綿花畑が造成され、多くの観光客が訪れている。旧日本領事館・木浦近代歴史館では若松兎三郎関連史料を展示し、陸地綿試作の由来などが紹介されている。

『綿花とその日本人 ～外交官若松の韓国 26 年』（金忠植著）が 2015 年 9 月に出版され、話題となり、『朝鮮日報』は 2017 年 3 月 22 日、朴鍾仁の土地の歴史「植民地痕跡が遺った木浦と現代版文益漸若松」という記事を掲載している。文益漸は 14 世紀に元から綿の種を持参して普及させた人として教科書にも載っている人物である。

若松兎三郎は木浦領事を始め、総督府の官吏、仁川米豆取引所社長として 26 年間韓国で暮らし、韓国文化を愛し、日韓の「共生」のために尽力した。帰国後は京都金閣寺付近に新居を構え、家族と共に余生を送りながら、同志社校友会長として母校の発展のために献身し、戦時中、様々な差別待遇を受けながら苦しんでいた在日韓国人たちの人権擁護のために奮闘した。

若松兎三郎のレガシーを見直そうとする動きが最近韓国で表れている。「善良な日本人」として評されている。



朴洪律木浦市長はじめ木浦市訪問団が
東京都板橋区坂本健区長を訪問

活動報告

◇日韓トンネル推進山口県民会議設立 1 周年記念講演会

永野慎一郎代表は、2016 年 4 月 23 日、山口県教育会館において開催された日韓トンネル推進山口県民会議設立 1 周年記念講演会に招かれ、「相互依存の日韓関係と日韓トンネル」と題して講演した。

◇秀林文化財団金熙秀記念秀林アートセンター開会式

永野慎一郎代表は、2016 年 5 月 12 日、ソウルで行われた秀林文化財団金熙秀記念秀林アートセンター開会式に出席した。

◇韓国木浦市長御一行様東京訪問歓迎会

2016 年 10 月 17 日、「故郷の家・東京」の竣工式に出席するために来日した朴洪律韓国木浦市長御一行様の歓迎会が東京新宿の和食レストラン「北大路新宿茶寮」で開催された。朴洪律木浦市長は東京滞在中、木浦市と交流のある衛藤征士郎衆議院議員、坂本健東京板橋区長、河野ゆうき東京都議会議員などを表敬し、地方レベルでの交流について意見交換が行われた。

◇日韓トンネル推進神奈川県民会議 3 周年記念大会

永野慎一郎代表は、2016 年 10 月 30 日、横浜情報文化センターにおいて開催された日韓トンネル推進神奈川県民会議 3 周年記念大会に招かれ、「未来志向の日韓関係と日韓トンネル」と題して講演した。

◇“高下島特別展”

永野慎一郎代表は、韓国木浦自然史博物館で開催された“高下島特別展”（2016 年 12 月 7 日～2 月 22 日）に明治期の外交官若松兎三郎関連の史料を提供した。若松兎三郎は木浦領事任中の 1904 年に高下島に米国種陸地綿を試作し、朝鮮半島全地域に普及させるなど、産業発展に寄与している。高下島には「朝鮮陸地綿発祥之地」記念碑が建ち、綿花畑が造成され、木浦市によって「綿花の島」として開発が進められている。木浦市は高下島の「綿花の島」としての象徴性を活用するため、木浦の儒達山と高下島を結ぶ海上ケーブルカーを建設中である。来春には完成予定である若松兎三郎のレガシーは最近韓国のマスコミにもしばしば登場し、善良な日本人として評価されている。『朝鮮日報』は 2017 年 3 月 22 日付の「植民地痕跡が残っている木浦と現代版文益漸・若松」の記事の中で若松の遺跡を紹介している。文益漸は 14 世紀に元から綿の種を密入して朝鮮半島に普及させた韓国では誰もが知っている歴史上の人物である。

◇国際シンポジウム

永野慎一郎代表は、12 月 8 日、韓国国会議員会館で開催された国際シンポジウムに招待され、『日本の立場からみた日韓トンネルの必要性』と題して発表した。

◇金熙秀先生顕彰碑除幕式及び評伝出版記念特別写真展

元韓国中央大学理事長・財団法人秀林文化財団理事長・学校法人金井学園秀林外語専門学校理事長の金熙秀先生顕彰碑除幕式及び評伝出版記念特別写真展が 2017 年 1 月 20 日、東京両国の秀林日本語学校で行われた。金熙秀氏は在日実業家で東京銀座において多数のビルを持ち、貸しビル業を営んで成功した事業家である。人材育成に関心をもち、私財を投じて、東京で秀林外語専門学校および秀林日本語学校を設立し、理事長として経営に携わる傍ら、韓国の名門私立大学中央大学の経営権を引き受け財団理事長として 22 年間大学発展に心血を注いだ篤志家である。中央大学の経営から離れた後、秀林文化財団を設立して文化事業を始めたが、2012 年に 88 歳で逝去された。今回の行事は逝去 5 周忌の記念事業であった。当アカデミーの理事である河正雄秀林文化財団理事長と申景浩秀林外語専門学校校長兼理事長の記念式典での挨拶文をページ 4 で紹介する。

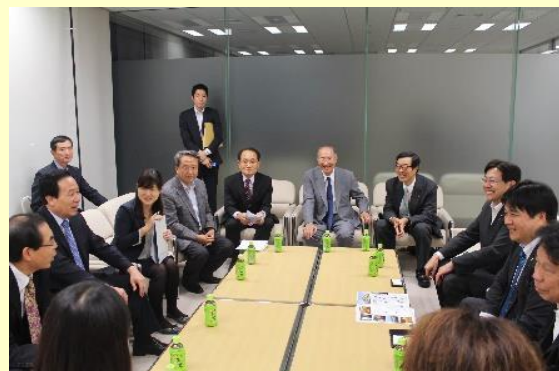
◇薄葉威士理事は、2 月 1～5 日、カンボジア議会及びテレビ放送事情調査のため、カンボジアを訪問した。

◇地方活性化・東アジア国際フォーラム in OKINAWA

永野慎一郎代表は、3 月 13～14 日、沖縄国際大学で開かれた「地方活性化・東アジア国際フォーラム in OKINAWA」に参加した。東アジア地域の研究者間の相互交流を通じ、グローバル化時代における地方活性化のための共同研究を推進することに合意した。



衛藤征士郎衆議院議員と対談する木浦市長



木浦市長東京都議会自民党議員団訪問

会員からの便り①

未知と謎のおもしろい国々

公益社団法人 中央日韓協会理事 薄葉 威士

北朝鮮（平壤）

「なぜ北朝鮮なんかへ行くの？」と言われるのはいい方で、「行ったら帰って来れないのではないかとまで見られている国に昨年9月、意を決して行ってみた。

ぜひ行ってみたかったのは檀君陵。あとはプエプロ号の展示、板門店。後者二つは定番の観光コースになっているようだ。飛行機で目的地に直接飛び込んだのではおもしろくないので、中国の瀋陽から列車で平壤入りしたが、途中の北朝鮮への入国審査は聞きしに勝るものだった。

鴨緑江を渡った新義州での入国審査は、客室(4人用コンパートメント)から他の乗客(北朝鮮人3人)を追い出し一人にされ、荷物を全てひっくり返されて、所持品一つ一つについて質問される執拗な検査だった。ただ、車中では同室の北朝鮮の人3人とモンテ(スケトウダラ)を着にビールを飲んでいろいろ話げできた。大同江ビール、案外いける。3人は貿易関係と言っていたが、いわゆる買出し部隊のようだ。ビール、駅弁等は全てご馳走になった。だからというわけではないが、北朝鮮に対する恐怖心、警戒心は相当程度解消した。「なんだ、我々と変わらない普通の人たちぢやないか」と。

平壤と開城を4泊5日で回ったが、せっかく取得したビザとパスポートを案内人に預けさせられる。ビザはともかくパスポートまで手元からなくなるのは心細い限り。何かあったらどうしよう。ただ、全旅程とも車がついて案内人と通訳がつく。通訳は不要との申し出は却下された。ともかく車でお供が二人つくという豪華(?)な旅になる。檀君陵とは、5000年前に朝鮮に初めて国家を建てたと言われている伝説上の王様の陵墓で、北朝鮮では実在の人物ということになっているが、日本では神話上の人物だ。

陵は平壤郊外にあるが、外国(観光)車両しか通さない道路を通って行く。いい道路だが、他の通行車両は全くなし。田園の真ん中にそびえていて景色は抜群だ。ただ陵の中に入るのに高額(?)な拝観料を徴収された。中に入って檀君の肖像画と柩は見たが、檀君の骨が納めてあるという棺箱を開けてもらうにはまた高額な別料金が必要とか。財布の都合で断念。

旅行の全行程を終えての帰りは平壤から空路北京経由での帰国。案内人と通訳も平壤空港まで見送りに来て、航空会社カウンターでの手続きは全てしてくれる。というより、私は通訳とともに待たされ、案内人が一人でカウンターへ行って手続き。よくわからないが意外と時間がかかった。平壤空港は規模は小さいものの意外と小ぎれいだった。ここでようやくビザとパスポートが返される。案内人曰く「よくパスポートを忘れてたりなくしたりするので、我々が預かるのが一番安全です」と。パスポートのない当方の心細さは全くの考慮外。

出発便の電光掲示板を見ると1日に3便。北京行が2便、ウラジオストック行が1便。曜日によってはこのほかに瀋陽行の便もあるようだが、1日の便数としてはこんな程度ようだ。世界一評判が悪いと言われている高麗航空の機内食はハムバーグ1個とコーヒーのみ。「食べたものではない、一口食って捨ててしまった」ということがインターネットに載っていたが、空腹だったせいか意外とうまかった。全部食べた。もう一個欲しかった。

かくして北京へ。あまり好きでない中国・北京だが、北京に着いて初めて、大げさに言う「ああ生き延びた」という感じ。北朝鮮滞在中はそれほど気づかなかつたが、やはり相当の緊張感があつたのだろう。

今回の北朝鮮旅行で、初めて犬の料理を食べてみた。案内人に勧められ、当初一口二口はおっかなびっくり。しかし意外といける。国の体制を別にすれば、北朝鮮は案ずるほどのこともなかったということか。

カンボジア（プノンペン）

今年2月に行ったカンボジア、これも少々意を決して(ガイド付き)でタイ国境寄りの田舎の史跡巡りをした。史跡そのものは興味深いものがあったが、トリ一匹まの料理はなじめなかった。ガイドが余りきれいでない手で素手で取り分けて(千切って)くれる。特にトリの頭(そのまま)がおいしいと言って勧める。さすが「ノーサンキュウ」で断ると、こんなにうまいものをなぜ?という顔で首から千切ってパクリ。

プノンペン市内から郊外に出る幹線道路が凄まじい渋滞とぬかるみ。ガイドが言うには、中国の援助で作った道路だが、作ってすぐあちこち壊れた。それで全て作り直しているとのこと。中国の工事はいい加減だと憤慨していた。発展途上の国ではよくあることだろう。

市の中心部での中古車販売にも驚いた。道端に駐車した列。そのすべての車に連絡先の紙が貼ってある、それも道路両脇に数十台。これが街の中に何カ所もある。明らかに違法だが、それなりの手続き(賄賂)をとれば問題ないらしい。そういえば、交差点で止められたトラックの運転手が交通整理の警察官にすつと何かを渡していた。ガイドに聞くと、通行できないトラックなので、即決の許可を得るための手続き(賄賂)だとか。白昼堂々とそのような手続きが行われている。

これもガイドに勧められて、いわゆる北朝鮮レストランに行ってみた。70、80席程度で料理は特に変哲のない朝鮮料理。行ったときは半分程度の客の入りだった。女性従業員は3年交代とか。みな現地語を含め3、4か国語は話せるとのこと。それに踊りが楽器ができる。小顔でスタイルはいい、いわゆる美女ぞろい。それにしては料金はごく普通。40分程度のステージ興行後は気軽に話に応じてくれる。しかし、この程度の料金で目に見える外貨稼ぎになるのだろうか。余計なお世話だろうが少々心配になる。

この1年ほどでマンマー、北朝鮮、カンボジアと回ってみたが、当然のことながらそれぞれの国の抱えている問題はそれぞれだ。だが、おもしろいと言えればこんなおもしろい国々はない。

(当アカデミー理事)

会員からの便り②

故金熙秀先生5周年忌記念式典

ご挨拶

財団法人秀林文化財団理事長 河 正雄

記録に残っているものだけが歴史であるという言葉があります。人間の生も同じであります。誰かの記憶の中に存在する限り、その人は決して紛れることはないと思います。金熙秀先生は日本帝国主義の植民地時代に朝鮮で生まれ、あらゆる困難を克服し、日本で成功した在日韓国人であります。先生は人材育成の為の第一歩として、日本で学校法人金井学園秀林外語専門学校と秀林日本語学校を設立し、理事長として務め祖国の名門私学である中央大学校を輝かせました。また、人生の最後には、「文化立国」の精神を実践するために財団法人秀林文化財団を設立しました。先生が一生をかけ成し遂げた業績をさらに継承・発展させることは残された私たちの誇らしい義務であります。先生の5周年忌追悼式にあたり、評伝「学びこそ宝」(劉勝濬 ユ・スンジュン著) 出版と共に先生の生前の足跡をたどり回顧する写真展を開催することになりました。展示場は先生が設立した学校法人金井学園秀林日本語学校であり、今回に先生の顕彰碑を建立することになりましたのは意義深いものであると思います。生前の先生のお写真は、胸しみる美しい思い出がよみがえります。その思い出と共に金熙秀先生の人生哲学を多くの人々に知らせる絶好の機会となることを願ってやみません。

(当アカデミー理事)



■ 編集後記

2017年はまだ4分の1が終わったに過ぎませんが、国際情勢の不安定化を象徴するような事象・事件等が続いています。1月のトランプ大統領就任、2月の金正男暗殺事件等、世界がどの方向に向かっていくのか、当事者である政治家ですら予想できない状態になりつつあります。こうした情勢下では、ややもすると、少なからぬ人たちが自国民のことだけを考えるようになり、外国については国家というマクロの単位でしか見えなくなることがありえます。そのような中で、それぞれの国の個別の人たちに温かい目を向けた今回の号は、大変社会的意義のあるものだと考えております。ご多用中にもかかわらず、御玉稿をお寄せ頂いた先生方には厚くお礼申し上げます。(大杉由香)

先生を偲ぶ

学校法人金井学園秀林外語専門学校校長・理事長
申 景浩

はじめに、金熙秀先生の評伝出版記念特別写真展及び顕彰碑除幕式に参列して下さった皆様に感謝申し上げます。先生をお送りしてから心強い味方を失ってしまったという喪失感と抛りどころのない寂しさは私にとって耐えがたい時間でした。しかし、先生の人材育成と文化発展の遺志を継ぐ一心で必死にここまで来られたのだと思います。ふと思い返すと、5年という時間が過ぎようとしています。今回5周年忌を迎え、先生の生き方と哲学を含めた評伝出版記念と顕彰碑除幕式を開催する今日は、まさに混沌とした世界情勢の中にあり、改めて先生のお言葉と姿を思い起させ、覚悟を誓う機会となります。さらに、この行事が開かれるこの場所は先生が教育による人材育成の最初の足跡として1988年に設立した学校法人金井学園秀林外語専門学校・秀林日本語学校であり、より意義深く感じております。5周年忌を迎え評伝出版と共に開催される記念特別写真展では、先生の幼少時代から、日々の気さくで人間的なお姿だけではなく、教育・人材育成に邁進していらしゃった時期、そして文化立国の精神を实践なさった晩年のお姿まで残すところなくすべてを展示しています。今日この場に参加して下さった方々の中で、先生にまつわる記憶をお持ちの方は美しい思い出を振り返る時間となるでしょうし、直接お会いになつたことのない方々においては、先生の生き方と哲学を知ることができる貴重な時間になればと存じます。あわせて、先生が私に残してくださった遺志をぶれることなくこれからも継いでいけるよう、最善を尽くしたいと思います。最後に重ねて金熙秀先生の評伝出版記念特別写真展及び顕彰碑除幕式に参列して下さった皆様、これまで激励して下さった方々に心より感謝申し上げます。

(当アカデミー理事)

